英仏における柔道の普及に関する研究

The spread of judo in Britain and France

1K10C378　星野映
主査 宮内孝知 先生　　副査　小野沢弘史 先生

【第１章　序論】

アレン・グットマンは著書『スポーツと帝国』（アレン・グットマン/谷川稔他訳、昭和堂、1997 年）で、柔道を「逆伝播」の最も顕著な例として挙げている。日本から海外への柔道の伝播・普及に関しては、さまざまな研究がなされてきたが、多くは伝播先に合わせた柔道の変容が普及に成功した要因としている。しかし、海外普及の要因としては、柔道の変容だけでなく、伝播先に適合する特性を柔道が元来持ち合わせていたということも考えられる。そのような柔道の伝播・普及の要因を、柔道の特性と歴史や社会的･文化的背景を交えて考察した。柔道の普及過程を探ることで、近代スポーツとしての逆伝播が成功した要因を探った。本研究では、講道館が創始される 1882 年頃から国際柔道連盟が成立する 1951 年までのイギリスとフランスに焦点を当てている。

【第２章　近代スポーツと柔道】

始めに、講道館の成立と、その初期の日本国内における柔道の展開を確認した。柔道以前の柔術の稽古は、いわゆる「体で覚える方法」であったが、嘉納は修行をしていく中でその技術に合理性を見出した。さらに修行は肉体の鍛錬だけでなく精神性や教育的価値を伴っていることに気がつき､1882（明治 15）年に講道館を創始して、柔術から柔道と名称を変えた。

講道館が発展していく中で柔道の合理性と精神性についての自信を深めていった嘉納は、指導者の海外派遣を目論んだ。明治の開国以降、西洋の文物を取り入れて成長してきた日本であったが、今度は日本から西洋に向けて文明を発信することで、国際社会で同じ位置に立てると考え、その文明が武術であり柔道であるとした。そして嘉納は、柔道をそれまでの武術との差を決定的にする合理性と精神性を重要視して海外での柔道普及に臨んだ。

また、柔道はその成立時から近代スポーツの要素を持ち合わせていた。井上俊の『武道の誕生』（2004、吉川弘文館）では、技の体系化やルールの制定など柔術が近代化して柔道になった際の要素が挙げられている。それを世俗化、合理化など、グットマンの近代スポーツの特質」と照らし合わせることで、柔道が近代スポーツ的特性を持っていたことを確認した。

【第３章　海外における柔道】

イギリスでは柔道以前に、興行などで生計を立てる柔術家たちがいた。そこには日清戦争日露戦争で勝利した日本人の武術に対する関心もあった。小泉軍治は 1918 年、ロンドンに「武道会」を設立した。これは、小泉の「日本の良いものをイギリス人に教えたい」という思いで創られたものだった。これは嘉納の海外柔道普及の考え方と重なるところがあり、武道会はイギリスにおける柔道普及の中心となった。また、イギリスでの指導法について小泉は、生徒たちが技の「科学的理論的説明」を求めることを述べている。普及活動は大学や警察などを中心に行われていた。

フランスでも柔道の前史として柔術が先に伝播していた。スポーツクラブが盛んであった当時のフランスでも、日露戦争に勝利したことによって日本の象徴とされた柔術が、昂揚するジャポニスムと相まって注目を集めた。しかし、ピエール・ド・クーベルタンの「柔術は真のスポーツではない」など、マイナスイメージが強くなって衰退した。1930 年代になって、学者であったモシェ・フェルデンクライスと日本の川石酒造之助が､「技の細かな分類」や「修行の進度を示す帯の色の細かな設定」など、新たな柔道の指導法を考え出した。ここにも科学的合理性が見られ、また、帯の色の設定は嘉納が採用した段位性と修行者の動機づけという共通点が見られた。

【第４章　考察・結論】

日本と英仏の柔道普及にはいくつかの共通点が見られた。①柔道普及の前史として柔術の存在があり、柔術からの武術性を残したこと、②警察・高等教育機関から柔道普及が展開されていたこと、③嘉納治五郎が見出した柔道の精神性や教育的価値が重視されたこと、④柔道が持つ近代スポーツ的な特性、すなわち科学的思考・合理性によって普及が行われたことである。

これら 4 つの共通点が柔道の「逆伝播」を成功させたと要因であると見られた。日本の伝統である武術性に、柔術との差異を強調する柔道の精神性・教育的価値が加わり、そして、それが近代スポーツ的性格をもって伝えられたことで英仏における初期の柔道の伝播・普及は成功したのである。